

1. 薬物動態/Pharmacokinetics

“Pharmacokinetics”の用語は 1953 年に出版された F.H.Dost の著書 *Der Bliitspiegel-Kinetic der Konzentrationsablaufe in der Frieslauffliissigkeit* ([Dost, *Der Blútspiegel-Kinetic der Konzentrationsablaúfe in der Krieslauffffússigkeit.*, 1953])の中で用いられたとされる ([Wagner, 1981])。Pharmacokinetics に対する日本語の「薬物動態」は比較的新しく、1974 年後半の臨床薬理誌に使用例([石崎 田原, 1974])がある。それ以前には pharmacokinetics に対応する用語として、生体内運命([大森, 1970])、薬物代謝([秋元, 1972])、生体内動態([加藤, 野口, 土屋, 寺川, 1974])、薬動力学([山岡, 1972])など、様々な用語が使われていた。1975 年には臨床薬理用語統一の考え方の中で、「薬物動態」にも触れられており ([伊藤, 1975])、Pharmacokinetics の用語の問題点の中に取り上げられている ([花野, 1975])。さらに pharmacokinetics を直接的に訳した「薬物速度論」も体内動態とともに用いられたり([田村, 1979])、英語表記のまま使われたりすることもあった([中野, 小川, 河津, 1979])。薬物動態が定着した時期としては、薬物動態談話会 (<http://danwakai.jp/about-page/outline/>)が薬物動態研究会から改称された 1983 年頃と考えられる。

薬物動態は薬物の吸収/absorption、分布/distribution、代謝/metabolism、排泄/excretion[これらをまとめて、ADME という]を取り扱う学問領域であるが、英語表現の kinetics が速度すなわち薬物の時間変化を取り扱うことを明示し、吸収・分布・代謝・排泄を明示していないのに対し、「動態」はより広く「吸収、分布、代謝、排泄」を包含している。そのため、英語では drug metabolism and pharmacokinetics(DMPK)という表現も使われる。英語でも日本語でも、意味する範囲は広く解釈することが一般的である。ちなみに、PK はサッカーのペナルティーキックの意味で広く使われているが pharmacokinetics を PK と省略する記法がこの分野の慣習になっている。最近では、医薬関連分野で PK が protein kinase として使われることも多いので注意が必要である。